

森鷗外の歴史小説『最後の一句』における官僚批判の心理

曾 玉蓉

(国立台湾大学大学院生)

一、はじめに

『最後の一句』の中で、親孝行の長女は父を助けるために、官庁の長官と約束して、自分の命を持って、父の身代わりにする。また、彼女が厳しく拷問されても冷静で、たじろぐ顔もしない。最後まで、このような冷やかな調子で、「お上の事には間違えはございませんまいから」と言った。

この最後の一句から見ると、長女は長官と協議を達したが、心からその反抗心または諷刺の心理などが多少あるとは言えるのではないだろうか。畑有三は「森鷗外「最後の一句」——発想について」の中で、次のように言っている。

『最後の一句』ができあがる二か月前、七月十八日には「齟齬」と題する漢詩のなかで「老來殊覺官情薄」という一句が書かれるようになるに至る。(中略) 恐らく、徐々に集積され自覚化させらるるに至ってきていた官僚機構に対する不快と不満の感情の総和が、退官問題を契機に一軒に爆発して制作モオティフと化したもの、それが<反抗>というモオティフであり、このモオティフの結実したものが『最後の一句』なる作品であったにちがいない。¹

長女に化身して、しかも明治官僚制度において一官長とした森鷗外は現実に官僚機構に対する批判の気持ちがあると窺える。中村文雄は「政治的不信と官僚批判と反抗を仮託した²」という言葉で「最後の一句」を評した。また、まさにこのような不満な気持ちを持っているからこそ、官僚の一員である鷗外は文学者でもあり同時に、作品を通して役人または官僚への不平の気持ちをそこに反映しようとする意図が理解できよう。

原典と作品との相違について、大筋から見ると、桂屋太郎兵衛はなぜ罪を犯したのかについて由来を述べ、太郎兵衛の家族全員を紹介し、続いて主人公のいち父の死刑を処されたことを知った後、父を助けるために自分の命をもって父の身代りにしたいと思い、兄弟と一緒に奉行所へ行き、それから家族全員が奉行所の役人たちに拷問され、最後は大嘗会で父が死刑を免じられたということでは原典と作品とはほとんど変わらない。但し、鷗外の『最後の一句』では会話の方式で述べられているところが多く、人間の情緒、感情などが容易に露呈されると窺える。作者が詳しく人間性により書かれた描写から見ると、作中人物の感情の動向が我々の読者に容易に感動を与え、感激な気持ちも容易に同じく方向へ帰一する。原典の方は客観的に事実を述べているのに対して、『最後の一句』の方は主情

¹ 畑有三「森鷗外「最後の一句」——発想について——」(1966)『国文学 解釈と教材の研究』

² 中村文雄「官僚 鷗外の側面」『鷗外記念会 51』鷗外記念室発行 P10

的に述べている。これは原典と作品との違った部分に一番重要なところであると言える。なぜかという、正にこのような部分を通して、原典の見えない官員たちに面倒なことを如何なる恐れ、いい加減にいち達を誤魔化そうとする態度、またはいちの如何なる上位者に対する憤懣や反抗の意を持っていることがとうとう現わされてきたわけである。蒲生芳郎は「鷗外はその小説を成すにあたって、半ばは原話に従い、半ばは原話を離れている。従ったのは原話の外枠についてであり、離れたのは原話の語る意味、そのところからである。(傍点はそのまま)」³と説き、そして、この心は何かというと、長谷川泉が「『最後の一句』における才気煥発な小娘の痛烈な官僚批判は、まさしく鷗外その人の心内の声である。⁴」と言ったように、今回は『最後の一句』を分析して、いったい鷗外はどのように官僚を批判しているのかを作品分析を通して探求したいと思う。

本論は四つの部分に分けて、それぞれ作中の人物の目や立場を通じて、官僚、または官僚機関に対する態度や考えなどを明らかにしたいと思う。

二、官庁の門番から町奉行の事を見る (官→官)

父の命を助けようとするいちたちは西奉行所に行ったとき、奉行所の門番が軽蔑な語調でいちたちを退けさせようとして、次のように言っている。

「やかましい。なんだ。」

「お奉行様にお願があつてまゐりました」と、いちが丁寧に腰を屈めて云った。

「ええ」と云ったが、男は容易に詞の意味を解し兼ねる様子であつた。いちとは又同じ事を言った。

男はやうやうわかつたらしく、「お奉行様には子供が物を申し上げることは出来ない、親が出て来るが好い」と云った。

「いいえ、父はあしたおしおきになりますので、それに就いてお願いがございます。」

「なんだ。あしたおしおきになる。それぢやあ、お前は桂屋太郎兵衛の子か。」

「はい」といちが答へた。

「ふん」と云つて、男は少し考へた。そして云つた。「怪しからん。子供までが上を恐れんと見える。お奉行様はお前達にお逢はない。帰れ帰れ。」かう云つて、窓を締めてしまつた。

奉行所の門番といちの会話の中で、門番は終始子供たちの事を低く見ていることが分かった。もともと大人の門番は子供のいちたちに丁寧に話し合う必要はないが、しかし、人命に関わることは簡単に見落とすのが出来るのか。いちたちが来る目的を知っている門番

³ 蒲生芳郎「桂屋いち——『最後の一句』」(1984)『国文学 解釈と鑑賞』

⁴ 長谷川泉「森鷗外の歴史小説と史伝」(1966)『国文学 解釈と教材の研究』

は問題を解決する意向もなく、かえっていたずらに面倒なことを避けようとした。これは下級官僚としての門番はすべきことなのか。もう一つは、下線部分により、なぜただの門番は奉行様の意思がわかるのかということである。まだいちたちのことを聞いていない奉行様の態度を「お前たちに会えない」と自ら判断した門番は必ず故があるのだろう。恐らく奉行様がこの前同じような状況に遇ってもこのように返事したのではないかと推測できる。そのため、門番たちもそのまま奉行様の与えたイメージ、つまり人情のない、面倒なことが嫌いだというイメージにより、奉行様の返事を勝手に臆断したのであろう。

三、いちの立場から上位者のことを見る（民→官）

いちが願書を出す前に、まず次のように奉行様の願書を受けた反応を推測してみた。そして、その反応に対してもう一つの対応方式さえも考えていた。

願書というものを書いてお奉行様に出すのである。しかしただ殺さないでおい
てくださいと言ったって、それではきかれない。おとっさんを助けて、その代わりに
わたくしども子供を殺してくださいと言って頼むのである。それをお奉行様がき
いてくださって、おとっさんが助かれば、それでいい。子供はほんとうに皆殺される
やら、わたしが殺されて、小さいものは助かるやら、それはわからない。ただお願
いをする時、長太郎だけはいっしょに殺してくだらないように書いておく。あれ
はおとっさんのほんとうの子でないから、死ななくてもいい。それにおとっさんが
この家の跡を取らせようと言っていらっしゃったのだから、殺されないほうが
いいのである。

もともと官吏としての奉行様は死刑囚を放免する権力がないので、いちたちがいくら奉行様に願いをしても無駄であると理解できる。しかし、まだ子供であるいちが命を持って、父の身代わりに死にたいという考えから見ると、実は問題になる。なぜかというと、父が死罪になると知った子供は恐らく激しく泣いたり、官吏に父を殺さないように頼んだりするのが普通であろう。しかし、いちの場合は泣くこともなく、かえって自分の命を父の命に交換しようとして頭で計画した。いちの考えでは、もし誰かが父の変わりに死んだら、父が救われるということである。これはまさにいちに与えた官僚のイメージではないかと推測できる。つまり、誰かが罪を犯したのかは重要ではなく、誰かが責任を取って死ぬこそ大事である。だからいよいよ処刑される日が来ると、奉行様の佐佐は「ようよう処刑の手続きが済んだのを重荷をおろしたように思っていた。」(P232)

また、いちが拷問されているうちに、怖くて緊張している兄弟の態度と違って、終始冷静で、しかも冷淡な調子で官吏たちの脅しに次のように返事した。

「そんなら今一つお前に聞くが、身代りをお聞届けになると、お前達はすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることは出来ぬが、それでも好いか。」

「よろしうございます」と、同じやうな、冷かな調子で答へたが、少し間を置いて、

何か心に浮んだらしく、「お上の事には間違はございますまいから」と言ひ足した。

下線により、一見、このいちの最後の一句は上位者のことに対しては確信しているが、実はこの最後の一句の中で、いちの不満や憎悪などの気持ちが含まれていると言える。なぜなら、口から上位者のことを信じているから、上位者の処置することが必ず間違えないと話したが、事件の最初から最後まで官員たちの大人らしくないやり方やいい加減な態度には、いちが恨みを抱き、不平に満ちていることが窺える。門番に止められることも、奉行様の時間を稼いでいい加減にことを解決することも、いちたちが問い詰められている間に奉行の佐佐は相手は子供だという事を無視して、かえって責め道具で子供たちを怖がらせることも、すでにこられることによって、抑えられた憤懣を集結してこの最後の一句を出したのである。これはまさに人を殺しても血を見ぬ風刺の一句と見てもよいであろう。

四、官員からいちの事を見る（官→民）

官員たちがいちに対して抱くイメージは次の三つのくだりに見ることができる。

まずは、いちが普通の子供の大好きなお菓子でも誘惑されずにただひたすらに願書を相手に出す。また、いちもほかの兄弟とは違って、このような状況に遭っても泣くことがない。だから官員の目にとっては「こわい」子と思われた。

「どうじゃ、子供は帰ったか」と、佐佐が声をかけた。

「御意でござりまする。お菓子をつかわしまして帰そうといたしましたが、いちと申す娘がどうしてもききませぬ。とうとう願書をふところへ押し込みまして、引き立てて帰しました。妹娘はしくしく泣きましたが、いちには泣かずに帰りました。」

「よほど情のこわい娘と見えますな」と、太田が佐佐を顧みて言った。

そして、いちの体つきから見るのもやはり彼女の表した態度や性格とがふさわしくないと官員たちに思われる。

次に長女いちが調べられた。当年十六歳にしては、少し幼く見える、瘦肉の小娘である。しかしこれはちとの臆する気色もなしに、一部始終の陳述をした。

また、官員たちに一番印象を残させたのはやはりいちの最後の一句である。そして、この最後の一句は全然子供の口から出る言葉ではないと強く感じる。氷のように冷たく、刃のように鋭い。

白州を下がる子供らを見送って、佐佐は太田と稲垣とに向いて、「生先の恐ろしいものでござりますな」と言った。心の中には、哀れな孝行娘の影も残らず、人に教唆せられた、おろかな子供の影も残らず、ただ氷のように冷やかに、刃のように鋭い、いちの最後のことばの最後の一句が反響しているのである。

いちの表した態度は確かに官員たちの感じたように全然子供っぽくないし、かえって年齢を超えて冷静すぎるように感じられる。但し、これらの引用文から見ると、実に一つのポイントが指摘できる。それはいちの冷やかで恐ろしい態度であるのに対して、官員たちの怖がる心情である。作者鷗外はこのように対照的な手法により、民と官との間に存在する不満や不平を表したいのではないか。なぜなら、それは中国のことわざの「平日は悪いことをしなければ、夜鬼にドアを叩かれても怖がらない」の通りである。もし、官員たちは何悪事がしなかったら、なぜいちの態度にこんなに気になって恐れているのか。それはおそらく心が道徳的に背いたことをしたからなのであろう。事件の最初から最後まで、ずっと面倒なことをわざと避け、いい加減な態度で物事を処理することで、負い目を感じたのではないか。要するに、官員の目からいちのことは見るのと、いちの目から官員のことは見るのとはまったく正反対の対照であり、官僚の負い目に対する反発の心理が見られる。

五、語り手から→官と民との対照

最後の章ではまず結論から言うと、語り手の立場から官吏と民衆との対照によって官僚に対する批判を見出すことができる。この章ではこの点について検討したいと思う。

まずは語り手が述べている人物の態度を見ることにしよう。

(1) 態度からの対照を見る

1、いちの態度があまり平気なので、門番の男は急にささえとどめようともせずにいた。

そしてしばらく三人の子供の玄関のほうへ進むのを、目をみはって見送っていたが、ようよう我れに帰って、「これこれ」と声をかけた。

「はい」と言って、いちはおとなしく立ち留まって振り返った。

2、子供たちは引き返して、門番の詰所へ来た。それと同時に玄関わきから、「なんだ、なんだ」と言って、二三人の詰衆が出て来て、子供たちを取り巻いた。いちほとんどこうなるのを待ち構えていたように、そこにうずくまって、懐中から書付を出して、まっ先にいる与力の前にさしつけた。

3、「お前の申し立てにはうそはあるまいな。もし少しでも申した事に間違いがあつて、人に教えられたり、相談をしたりしたのなら、今すぐに申せ。隠して申さぬと、そこに並べてある道具で、誠の事を申すまで責めさせるぞ。」佐佐は責め道具のある方角を指さした。

いちはさされた方角を一目見て、少しもたゆたわずに、「いえ、申した事に間違いはございません」と言い放った。その目は冷やかで、そのことばは徐かであった。

「そんなら今一つお前に聞くが、身代わりをお聞き届けになると、お前たちはすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることはできぬが、それでもいいか。」

「よろしゅうございます」と、同じような、冷やかな調子で答えたが、少し間を置いて、何か心に浮かんだらしく、「お上の事には間違いはございますまいから」と言い足した。

佐佐の顔には、不意打ちに会ったような、驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて、陰しくなった目が、いちの面に注がれた。憎悪を帯びた驚異の目でも言おうか。

しかし佐佐は何も言わなかった。

- 4、 元文ごろの徳川家の役人は、もとより「マルチリウム」という洋語も知らず、また当時の辞書には献身という訳語もなかったので、人間の精神に、老若男女の別なく、罪人太郎兵衛の娘に現われたような作用があることを、知らなかったのは無理もない。しかし献身のうちに潜む反抗の鋒は、いちとことばを交えた佐佐のみではなく、書院にいた役人一同の胸をも刺した。

上の四つの部分から見れば、いちの大人しく冷静な態度であることに対して、官吏たちの慌てて怖がる反応であると見られる。また、とくに四つ目の引用文から見ると、さらにいちの上位者に対する反抗や批判、不満な態度が明らかに述べている。

(2) 官吏のいい加減や誤魔化す態度を見る

この節は語り手が事件を処理する官員たちの態度を述べた部分から見る。

- 1、 西町奉行の佐佐は、両奉行の中の新参で、大阪に来てから、まだ一年たっていない。役向きの事はすべて同役の稲垣に相談して、城代に伺って処置するのであった。それであるから、桂屋大郎兵衛の公事について、前役の申し継ぎを受けてから、それを重要事件として気にかけていて、ようよう処刑の手続きが済んだのを重荷をおろしたように思っていた。

そこへけさになって、宿直の与力が出て、命乞いの願いに出たものがあると言ったので、佐佐はまずせっかく運ばせた事に邪魔がはいたように感じた。

「参ったのはどんなものか。」佐佐の声はふきげんであった。

(傍点は筆者による)

- 2、 「そうか。」佐佐はしばらく書付を見ていた。ふつつかなかな文字で書いてはあるが、条理がよく整っていて、おとなでもこれだけの短文に、これだけの事がらを書くのは、容易であるまいと思われるほどである。おとなが書かせたのではあるまいかという念が、ふときざした。続いて、上を偽る横着物の所為ではないかと思議した。それから一応の処置を考えた。太郎兵衛は明日の夕方までさらすことになっている。刑を執行するまでには、まだ時がある。それまでに願書を受領しようとも、すまいとも、同役に相談し、上役に伺うこともできる。またよしやその間に情偽があるとしても、相当の手続きをさせるうちには、それを探ることもできよう。とにかく子供を帰そうと、佐佐は考えた。
- 3、 城代も両奉行もいちを「変な小娘だ」と感じて、その感じには物でも憑いているのではないかという迷信さえ加わったので、孝女に対する同情は薄かったが、

まずは一つ目の引用文から見ると、語り手の二つの批判が見られる。一つは自分の意思のない佐佐に対する批判である。もともと新任の役人が先輩の意見を伺うのは極自然なことであるが、しかし、「すべて」のことについて上意を窺うのはあまり不合理である。誰でもすぐ上位者への媚びへつらう行為と連想されやすい。たとえそうでなくても、すくな

くとも自分で判断する能力を持たない無能な役人は、世間の笑いものになるのであろう。

また、もう一つは佐佐の面倒の嫌がる態度である。太郎兵衛の処刑が近づけば近づくほど、佐佐は大きい荷物を卸したように楽になった。だから、いちたちの要求に対しては「邪魔がはいったように感じた。」これも語り手により、作者が官吏の取っていけない態度を批判しようとしてわざわざ書いて、読者の注目を引きたいところではないか。

次の二つ目の引用文でも同じように、佐佐が願書を読んだあと、一番頭に浮かぶのはいちたちのかわいそうな状況ではなくて、かえって彼らは必ず誰かから指示されるのではないかと自ら推測した。自分の判断できない場合、「とにかく」子供を帰らせて、できるだけ処理の時間を稼ぎたいと見込んでいる。

いずれの状況にしても官吏のいい加減、または誤魔化す態度が一目瞭然であろう。

六、おわりに

以上のように、まずは官庁の門番から町奉行のときを見るとき、奉行様が門番に与えたイメージは人情のない、面倒がりやであることが見られる。次はいちの立場から上位者のことを見る場合、一見、この最後の一句は上位者のことに対しては何の批判や反抗する気持ちが見られない。しかし、その中に、実はいちの不満や憎悪などの気持ちが含まれていることを見出すことができる。風刺や皮肉な一言と言える。また、官員からいちのことを見るのも同じように、官員たちはいちのことを怖いと思えば思うほど、自分たちの負い目のところが明らかに示されるのである。最後の語り手の立場から見ると、さらに官吏と民衆との対照により官僚への皮肉な部分は多く見られる。いずれにしても、官庁の門番、主人公のいち、それから官員たち、最後は語り手、それぞれの違った立場により官僚のことを見る。表面上には官僚に批判することを何も言っていないが、しかし、深く会話あるいは描写を細かく考えて見ると、門番が上位者の心理を当て推量をすること、いちが風刺な一言を言うこと、または官員たちが怖がる態度を持っていることはすべては官僚の態度をめぐって描いているのではないか。このように、これらの分析部分を通して、作者の官僚への風刺、または官僚への批判の意図が読み取れる。

※以上の下線の引いた部分はすべては筆者によるものである。

*参考文献（年代順による）

- 1、特集『森鷗外の総合探究 附・森鷗外研究文献総覧』（1966）『国文学 解釈と教材の研究』学燈社
- 2、（1984）『国文学 解釈と鑑賞』学燈社
- 3、森鷗外著（1999）『鷗外歴史文学集 第三巻』岩波書店
- 4、森鷗外著（2000）『鷗外歴史文学集 第二巻』岩波書店
- 5、森鷗外著（2001）『鷗外歴史文学集 第四巻』岩波書店
- 6、研究誌『鷗外記念会 51』鷗外記念室発行